

令和5年度 鈴鹿市立飯野小学校 関係者評価書

* 評価は、1:十分にできている 2:概ねできている 3:どちらかというできている 4:できていないの4段階評価 (各指標の数値については、小数第2位で四捨五入)

評価項目	本年度の活動と指標	達成状況【アンケートR4.11→R5.11】	評価	成果と課題(◎成果、▲課題)	学校関係者評価	来年度に向けた改善点
<p>(確かな知学力教育成)</p>	<p>◎主体的・協働的・深い学びへの授業改善(児童アンケート結果) -自分の思ったことや考えたことを進んで発表する:75%以上 -算数や国語の勉強が好き:75%以上 ○「フーント」等を活用した既習事項の復習等による学力の定着(全国学力・学習状況調査【以下:学調】結果) -国算:全国比98%以上(学調結果の分析、取組検討) ○「授業力UP5★」を意図した授業の推進(研究授業後の事後検討会の質の向上) ○ICT機器の積極的活用による授業改善 -児童用端末を活用した授業1回以上 ○読書習慣と読書力の定着(児童アンケート結果) -読書が好き:85%以上 ○家庭学習の充実(10~15分×学年の家庭学習時間の確保) -保護者アンケートでの肯定的評価80%以上</p>	<p>(児童)進んで発表する:70→82【算数や国語が得意:項目別除】 【勉強はわかるか:90→91】 ○読む書くワークシート、読むYOMUワークシートの活用。みえスタディチェックの過去問の活用。 ○学調結果(R5年度:全国比 国語95 算数90) -学調結果を分析、具体的対応策を実施 -R5年度5年生第1回みえスタディチェック結果(国語:県との差3.7 過去との差-0.7)(算数:県との差2.1 過去との差2.7) ○学調分析結果を保護者、学校運営協議会に公表 ○研修理念について文章化し、職員で共有 ○各学年の校内授業公開、「授業力UP5★」の観点に基づいた事後検討会の実施 -校内研修会で、学年間の系統性を意識した教材研究 ○ICT端末の日常的な活用 ○月曜朝に朝読の時間を設定。おうちで読書などの取組や巡回指導員、読み聞かせボランティアの活用、図書委員会による図書祭り 【読書が好き:85%以上】 【読書が好き:85%以上】 【保護者】家庭学習の習慣が身につけている:83】</p>	<p>2</p>	<p>【学びの基礎づくり】 ◎規程支援や動作化、頑張りや認めるなどの支援による基礎学力の定着 ◎学年で検討して作成した教材の共有による工夫した授業づくり ◎聴きあうことを大切にしながら学びの向上と学習内容の定着 ◎学習規律や聴き方、話し方等の4月の授業による、全学年での成果の積み上げ 【全国学力学習状況調査 みえスタディ・チェック】 ◎「言葉のたからばこ」等の活用による国語力・読書力の向上 ▲【読書】算数:図形、比例、問題から必要な情報を読み取る。国語:「書く」領域【主体的・対話的に深い学びのある授業づくりに向けた校内研修】 ◎授業公開における成果と課題がより良い実践につながった。 【ICTの活用】 ◎日学的な活用で、多くの児童が抵抗感なく使用している。高学年ではほとんどの児童が表を見ずにローマ字入力をする事ができている。 ◎書くことに課題がある子どもにとって、デジタル教材を使うことで意欲を高めたり苦手意識を減らしたりすることができた。 【読書の推進】 ◎毎月曜日朝の「全校読書」、お家で読書→読書時間の確保 ◎読み聞かせや並行読書、図書委員会の図書まつり ◎ボランティア、巡回指導員と連携した読書環境の整備 ◎貸出冊数を9月1日2日に変更したことによる読書冊数の増加 ◎学文文庫の充実 ▲主体的な読書につながっていない。家庭との連携が必要。 ▲読書は好きでも、時間を作るのが難しくなっているのではないかと。 ▲家庭の協力が得られない事例が少なくない。それを考慮した宿題内容を検討する必要がある。 ▲フロームブックの持ち帰りにも関わって、内容の工夫の必要あり。</p>	<p>【学習・学力向上】 -学校での取り組みは着目できている。 -コロナ以前の学校生活が戻ってきた。笑顔や笑い声も再び聞かなくなった。 -学力向上に向けて基礎基本(計算・読み等)の学力の定着、自ら学び考える子の育成、学び合いの深い学びの学習、ICTの活用、家庭学習の充実、学習ボランティアの活用などさらなる取り組みに期待する。 -積極的に手を挙げて発言している様子が見られ、明るく活発なクラスは先生との関係も良好に見えた。 -問題を解くと、すぐにあきらめるのではなく、粘り強く考え、取り組む姿が目指したい。 -子どもに頼らずとも、学習方法を身につけられるといい。 -自分に合ったプリントを選んで学習で子どもが苦手な部分を繰り返し学習していく仕組みがあるといい。 -ICTの活用の関係でノートを書く機会が減っているが中学生に向けて低学年からの積み上げも意識して指導して欲しい。 -読書力・文章力に弱さを感じる。具体例を挙げて指導をしてほしい。以前のようグループ学習が今後増えていけば、学び合いやコミュニケーションがうまくいけるのではないかと。 【ICT】 -Chromebookを使っている家庭学習は親も一緒に見てやるというのではなくてきた。選択式だと本当に持っているのだから心配な面がある。しかし、自分で取り組んでいるのはありがたい。 -宿題では親の理解が難しい。 -新しいツールとして活用する姿も見られたが、持ち帰り学習以外の使用(ゲーム等)もあり困ることがある。 -子どもは活用能力は高い。キーボードへの打ち込みも早い。 【読書】 -家庭での読書が増えるのは良いこと。保護者にも理解が広がるとよい。 -図書館祭りでたくさん読んだ児童が本に魅了されたのはよかった。今後の読書の広がりにつなげてほしい。 -感想文が苦手な子にはDVDなどを活用するのでもいいのではないかと。(動画を活用して読書の足掛かりにする) -ゲームの時間があるのなら少しでもその時間を読書に回してほしい。子どもたちが喜んで読書を取り組める施策(ポイント制、本紹介、リーフレット作りなど)があるとよい。 -スクールワークを整備して活用できる環境にしてほしいか。 【行事】 -運動会や参観ができるようになってきたことは学校理解と子ども前向きになってよい。</p>	<p>・みえスタディチェック 学習で親の確認された「書く」、読書力向上について、継続して取り組んでいく。 ・ペアやグループ活動を積極的に取り入れ、学びあい、表現する力をつけていく。 ・自主学習(イノート)の取り組みに力を入れ、与えられたものをするのではなく自ら課題を立てて取り組めるようにする。 ・「読む書くワークシート」などの活用、読書の推進などで読書力の向上に努める。 ・児童に必要な学力を身に付けさせることができるよう、学校全体で方向性を共有し、校内研修を進める。 ・宿題等の家庭学習を進める際に、児童各々の学びにつながる家庭学習になるようICT機器の活用も含む課題設定の工夫を行う。 ・授業中集中が途切れがちな児童や遅延な家庭学習をもつ児童等への学力保障に向け、保護者対象のアンケート実施や生活チェックシートの結果分析を通して、一人ひとりの生活背景等を踏まえた取組を検討する。 ・図書の時間以外に休み時間に図書室へ自分で借りて本を借りる児童が少ないので、図書委員会も含め手立てを考え取り組む。</p>
<p>◎外部人材の活用(学習支援ボランティアの活用と支援の充実)(支援の方向性についての方針の共有)(ボランティア活用計画の作成) -年間計画の作成および共有(外部人材の活用) -各学年1回以上招聘</p>	<p>(1年)環境学習 (2年)地域の施設・会社(三重軌道、八幡神社、リュウベック、相好体操クラブ、陸順寺、R-cafe、虎屋勝月見学)・EAS・夢工房(音楽療法) (3年)環境学習 (4年)社会福祉協議会(アイマスク体験) (5年)ラジオによる貧困(SDGs)、JICA(ボランティア、キャリア教育) (6年)相模教室</p>	<p>◎ボランティア、巡回指導員と連携した読書環境の整備 ◎貸出冊数を9月1日2日に変更したことによる読書冊数の増加 ◎学文文庫の充実 ▲主体的な読書につながっていない。家庭との連携が必要。 ▲読書は好きでも、時間を作るのが難しくなっているのではないかと。 ▲家庭の協力が得られない事例が少なくない。それを考慮した宿題内容を検討する必要がある。 ▲フロームブックの持ち帰りにも関わって、内容の工夫の必要あり。</p>	<p>2</p>	<p>【学習支援ボランティア】 ◎地コディネーターと連携することで、安心して効果的な学習活動を進めることができた。 ◎学級担任は、ボランティアの支援があることで児童と関わる時間を生み出すことができた。 ◎三重県地球温暖化防止活動推進員を招聘して、環境学習を行うことができた。</p>	<p>いろいろなことに関心をもって視野を広げていくという面でも継続して取り組んでほしい。 ◎地コディネーターと連携することで、安心して効果的な学習活動を進めることができた。 ◎学級担任は、ボランティアの支援があることで児童と関わる時間を生み出すことができた。 ◎三重県地球温暖化防止活動推進員を招聘して、環境学習を行うことができた。</p>	<p>・引き続き、学習支援ボランティアの活用や地域教材の発掘、地域人材との連携等外部人材の活用を推進していく。 ・授業等を受け入れていただける企業・団体・商店等の新規開拓を検討していく。</p>
<p>◎外国籍児童への支援・多文化理解(JSIバドミントンの活用と取組授業) -バドミントン:1以上UP バドミントン活用に向けた研修実施 -各学年1回以上 -地域等との連携</p> <p>◎自尊感情を高めるための仲間づくり、人権学習の取組(児童アンケート結果) -自分には良いところがある:85%以上 (人権学習の実施) -権教教材等の使用:学期1回以上 (道徳の実践研究) ○人権侵害・差別事象への対応 ○いじめへの迅速かつ適切な対応(いじめアンケートの実施) (教育相談の充実) ○不登校傾向児童への初期対応、自立支援の充実 -30日以上および10日以上欠席の児童数:昨年度から減少</p>	<p>(バドミントンの活用と取組授業) -バドミントンについては、到達度ではなく今のその子の状態がどうかを調べるツールの一つなので、1年間1以上UPは嬉しい。 -バドミントンの研修を行ったことで、理解が進んだ。 -取り出し授業では、初期支援の転校生もあり、指導がなかなか徹底できなかった。 -〈ちがいを認める教育実践〉 -多文化共生教育について、各学年学期一度は授業をしてもらった。 -地域との連携は、特になかった。</p> <p>(児童アンケートの実施) -「自分には良いところがある」に「はい」または「どちらかといえばはい」と回答した児童:86.2% (職員研修の実施) -教科書無償化 -人権1レポート研修会 -個別学習サポート学習会 -子どもの権利条約 -人権教育研修会(部活動問題学習について) -生活つり方研修会 (人権学習の実施) -県教委教材等を使用し、授業ができた。 (不登校傾向児童への初期対応、自立支援の充実) 30日以上および10日以上欠席の児童数:昨年度と同数。 (不登校児童支援) -ほっとルームの開設</p>	<p>◎バドミントンの研修を行ったため、意識して指導をしてもらった。 ▲「コロナ」異学年の子どもの指導をすることが多かったため、指導者を増やす必要がある。 ◎これからは、各学年学期一度は多文化共生教育を行っている。 ◎5年生が社会見学(海外民族博物館「リトルワールド」)で学んださまざまな国の文化のまとめで校内に掲示することで、他学年にも興味関心をもってもらうことができた。 ◎コロナ禍で交流ができていなかったが今年度は、実現できた。 ◎情報・掲示委員会で、世界の国々について、発信する掲示物を作成することができた。 ◎スマイルへの取り出し児童について、担当者と担任が連絡ノートを使って情報共有をできたのがよかった。</p>	<p>2</p>	<p>【人権学習】 ◎各学年や子どもの実態を具体的に把握し、課題解決のための実践を行い、それを夏と冬と春の2回、全教員にレポート研修することにより、取り組みの在り方について検討することができた。 【虐待・不登校への対応】 ◎友人関係で悩んでいる児童や、不登校傾向にある児童の保護者をスクールカウンセラーにつなぐことで、教師以外にも相談窓口を作ることができた。 ◎全職員が不登校傾向にある児童の確認ができ、随時状況の更新ができる資料を作成し、情報共有がしやすくなった。 ▲情報共有するだけでなく、具体的にどのように支援をしていくか話し合う機会を定期的に持つ必要がある。 ◎ほっとルームできたことにより、別室対応ができるようになった。 ◎ほっとルーム・わかばの教室があることで、出席日数が増えた児童がいた。</p>	<p>外国語の掲示ポスターの取組など良かった。 ◎多国籍になり、言語など対応できる先生を増やしていく必要がある。 ◎国際や特別支援学級の児童に常に声掛けがあり、助け合いや友だちづくりに良い関係だと感じた。 ◎外国籍児童とのコミュニケーションを大切にしたい。外国の文化を学び、EASの生徒なども交流する機会ができるようにしてほしい。 ◎鈴鹿市は多国籍である。現在も多くの職場で外国の方と仕事をし、言葉は通じなくても意志は通じる仕事はできる。スマートフォンで翻訳もできる。子どもたちの将来に活かしてほしい。 ◎外国籍児童の良いところを素直に話す子がおりうまく交流させてもらっていると感じた。 ◎5年生社会見学の「リトルワールド」は様々な国の文化を学べたよかった。</p>	<p>・2年生がEASを訪問したり、5年生が社会見学で「リトルワールド」へ行ったりと、異文化にふれる機会があった。しかし、それを他学年や保護者、地域に知らせることはできていないため、校内の目につくようなところに新聞を貼ったり、児童集会で学習発表をしたりして、広げられるといい。 ・月1~2回のSCによる相談のほか、各担任や特別支援教育コーディネーター・連絡担当・養護等が連携して児童を見守り、必要に応じて相談を行う体制を整えていく。 ・各担任や特別支援教育コーディネーター・連絡担当・養護・SLS等の職員で連携し、教室入りり児童や不登校傾向の児童への支援を継続する。 ・「わかば」や今年度新設された「ほっとルーム」のさらなる活用を進める。 -創設中学校区連絡協議会での情報交換を継続する。 -子ども家庭支援課や教育支援課等の関係機関や、SSW等との連携を進める。</p>
<p>◎特別支援教育の充実(個別的教育支援計画等の作成) -すずかっ子支援ファイル(以下「支援ファイル」と略)の作成:100% -児童の発達や養育の課題等について、関係機関と連携した支援会議等の開催(特別支援学級と通常学級との連携強化)</p>	<p>(特別支援教育の研修・啓発) -特別支援教育たよりの発行(2月予定) -職員研修:特別支援学級児童の理解と支援方法についての研修会を実施 -通級指導教室「わくわく教室」の紹介(2年生)や授業内容の体験(数クラス)を行う。 (支援ファイルの作成) -個別相談等で保護者と共有し、今後の指導に活かすようにした。 -特別支援学級在籍児童、通級児童を含め支援を必要とする児童の作成:100% (支援会議の開催) -支援会議は年間通して20回、引継ぎは新入児10名、卒業生15名行う予定。 -学年単位の支援会議やケース会議を開催。 -教室に入りづらい児童について、わかばやわくわく教室、保健室、ほっとルームなどで対応し、子どもたちの居場所を確保した。 -スクールカウンセラーは、年間12回行い、保護者や児童の面談(35名)や児童観察をしていただいた。 <特別支援学級と通常学級との連携強化> -原日会議を4月と6月に実施。</p>	<p>◎特別支援に関する研修や保護者への便りを発行し、特別支援に対する理解を深めたり、自らの行動を振り返り振り返ることができた。 ◎支援が必要な児童のファイル作成に取り組むことができ、職員会議等で子どもについての情報共有はできた。 ◎特別支援教育コーディネーターと担任が情報共有を図りながら、支援や対応について考えることができた。 ◎日常の情報共有の時間や有効な支援が行える人員の確保が課題である。 ◎カウンセリングの日程を便り等で定期的に知らせることで、カウンセリングの申し込みが増えた。 ◎特別支援学級の児童数が増えているが、原日会議を定期的に開催することで、情報交換・情報共有ができた。 ◎年度当初に、取り組むべき人権課題について、提案することで、意識して人権授業について考えることができた。 ◎学年・学級で起きた差別事象・児童の言動等について、学年だけでなく学校でも情報共有し、学校全体で考えていく必要がある。教職員の研修や考える機会も増やしていく必要がある。</p>	<p>2</p>	<p>◎特別支援学級に行くことも良い表情で出てくれる。毎回参観のたびに成長を感じる。支援ファイルの作成と引継ぎは大切。全職員での情報共有の大切さは毎年言われている。特別支援学級の児童も教室を出るとき、挨拶をしていくのはいいことだと思う。</p>	<p>◎特別支援学級に行くことも良い表情で出てくれる。毎回参観のたびに成長を感じる。支援ファイルの作成と引継ぎは大切。全職員での情報共有の大切さは毎年言われている。特別支援学級の児童も教室を出るとき、挨拶をしていくのはいいことだと思う。</p>	<p>・「ひまわり」や「わくわく」の取組について、児童・保護者へのさらなる周知を進める。 ・「すずかっ子ファイル(すずかっ子支援ファイル)」を活用し、保幼小中だけでなく、高等学校等や就労も踏まえた「途切れのない支援」につながるよう取組を継続する。</p>